

タイ語・ビルマ語の学習について¹⁾

ロバート B. ジョーンズ

今ここでタイ語とビルマ語の教授法あるいは学習法について何か話をするようにとのことですが、まず一般的なことから述べた方がいいかと思います。重要なことはタイ語やビルマ語についても他の諸言語を教える場合と基本的には同じだということです。すでに御承知かと思いますが、アメリカにおける新しい言語教授法の基本原理はすべての言語に対して打ち立てられたものです。

さて、どの外国語を学習する場合でも、明らかに必要なものが二つあります。よい教師とよい教材です。残念なことに東南アジアの諸言語の場合、われわれはこの両方とも大いに不足しています。特に教材はそれがよかろうと悪かろうと選択している余裕がないほどわずかしかなりません。教師についていえば、最も理想的な言語教師というのは、次の二つのことを自分自身に兼ねそなえた人です。すなわち、自分の専攻する言語に関する具体的な知識と言語学の一般的な理論をその言語に応用できる能力とです。アメリカでは実際にはこの二つの必要を二人の人間で満たしています。教材を用意してその課程を指導管理する言語学者と、自分がモデルとなって直接に教室を指導する *native speaker* の二人です。

外国語の教授についての言語学者の機能が完全に果たされた場合には、*native speaker* がその完全な教材と課程にしたがってひとりで自分の機能を果たせばよいでしょう。しかし実際には利用できる教材が極めて貧弱である以上、言語学者の機能はまず有効な教材を整えることと、もうひとつはそれらのすでにある教材では扱われていないが、新たに起こるに違いないような問題を扱うということです。*native speaker* に

はその能力がありません。彼らはただ自分の母国語が操れるだけであって、たとえばアメリカ人の学生が東南アジアの言語について抱くような問題を認識することはほとんどありません。それは明らかに言語学者の仕事なのです。

それでは、われわれが直面するのはどのような問題であるかを簡単に論議してみましょう。言語のいわゆる文法というものは案外あまり多くの問題をもちません。ある言語の文法がどんなものを示すことはむしろ容易なことだといってよいでしょう。最も難しい問題は意味にあります。私たちの場合ですと、英語とたとえば東南アジアの言語との間で意味がどのように重なり、あるいはずれるかということです。つまりその言語の形式の意味をはっきりつかむことが重要な問題なのです。なかでも難しいのは、いわゆる文法的な機能語とよばれるものについてでしょう。

二つの言語の間における意味の重なり方についてタイ語とわれわれの英語を例にとってみましょう。英語においては時間の要素、動詞のテンスがはっきりしていて、過去とか未来とかがはっきりと区別されています。ところがタイ語にはそのようなものがなく、同一の形式があるときには過去に、あるときには未来に訳されるなど一定していません。

ひとつの実例をあげましょう。この例はちょうど出発する直前にぶつかった問題なのでよく覚えています。

khăw kamlaŋ cà? chuan dichăn paj du· naŋ

ここに下線を引いた単語は文法機能語とよばれるもので、最も簡単に、したがってまた極めて不精確には未来時制を表わすものと定義することができます。辞書を見ていただくとたいい「will do something」と訳されているでしょう。ところで、この発話の行なわれた場面についていうと、ある若い娘と彼女の母との対話で、それより前にある青年が彼女を訪ねて来たので、母が娘に彼が何しに来たかを尋ねたときに彼女が答え

1) これは Cornell 大学教授 Robert B. Jones が去る 5 月 23 日に当研究センターにおいて行なった講演を大学院学生の三谷恭之君(文)に邦訳してもらったものである。なお、後の質疑応答はそのとき行なわれたものから参考になると思われるものをひろったものである。

たのがこの発話だったというわけです。明らかに彼女が語っていることは過去に属する行為についてです。訳せば *He came to invite me to go to the movies.* となります。ところが普通は未来を表わす文法機能語と考えられている *cà?* が使われているのです。実はこれは彼女を訪ねて来た青年の行為が勧誘とか提案といったものだからであって、それは彼が言ったであろうことばが “*Will you go to the movies with me?*” か何かであったことを考えれば大体わかることです。

ところがここには実際にはもっと複雑な問題があるのです。母と娘の会話がここで終わっていたからです。この場合の疑問はもちろんその娘が青年のさそいに応じたのかどうかということでしょう。事実はこちらです。母親は娘の上のような返事だけで彼女が断わったことがわかったのです。もし彼女が同じセンテンスを *cà?* だけ抜いて言ったとすると、母親は娘にそれで行くのか行かないのかと問わなければならなかったでしょう。しかし *cà?* を含んでいると彼女がさそいに応じなかったことがわかるので尋ねる必要がなかったわけです。このように *cà?* という文法機能語は英語の未来というテンスとは大きく異なっているのです。

同じように、いわゆる過去のテンスについても、タイ語と英語とでは極めて多くの場合に異なっています。否定形においてだけは全く同じです。 *māj dāj paj.* は確かに (I) *didn't go.* です。しかし否定形でない場合は、たとえば *phǒm dāj paj.* は *I went.* と等しくありません。それは *I had the opportunity to go.* を意味します。もっと精確にそのほんとうの意味を英語でいえば、 *I had the opportunity to go and I did go.* となるでしょう。

未来とか過去とかいった時、あるいはテンスに関する意味の重なり方の問題は、たとえばアメリカ人の学生が日本語を学ぶ場合にも起こるものです。御存知の通り日本語のイキマシウネは *I will go.* と同じではありません。ところがイキマシタの方はかなり *I went.* に近い意味です。そこで私たちアメリカ人にとって日本語での問題は、未来形というかシウ、ヨウで終わる形の意味を理解することにあるのであって、過去形の方はさほど問題ではないわけです。タイ語ではどちらも問題となります。

タイ語にしろどんな外国語にしろ、学生がそれを真

に正しく使えるように教えるとき、最大の問題は自国語とその外国語との間のこのような意味の重なり方です。対応する形式の意味が必ずしも完全には重ならないからです。このような意味上の相違あるいはズレといったものを十分に知らないと、その言語を流暢に話すことができて、また相手も一応は理解してくれても、本当に自分の言いたいことを理解してもらうことはできないことがあるでしょう。

もうひとつそのような例をあげてみましょう。私の学生の一人が最近タイ国からフィールド・ワークを終えて帰って来ましたが、彼のいうのには、タイ国では英語の *to be too much*~ にあたるといわれている動詞 + *kæn paj* という形は少しも使わないということでした。たとえば *phæŋ kæn paj* «*to be too expensive*». だれも *phæŋ kæn paj* といわずただ *phæŋ paj* というのです。この学生はタイ国生まれかと思われるほど流暢にタイ語を話すのですが、やはりこの点では不十分だったわけです。実は *phæŋ kæn paj* の方は何かある客観的な標準から見てその物が高すぎるということであって、*phæŋ paj* の方はたとえば市場で物を買うときそれが自分にとって高すぎるという場合に使われるものであったのです。ところが、この二つの表現を英語に訳した場合、*phæŋ paj* の方をあえて *It's too expensive for me.* としない限り、どちらも *It's too expensive.* であって、二つの間の意味の違いをはっきり表わすことはできません。

結局、こういった意味に関する問題が最も難しいことでもあり、また最も重要なものでもあるわけです。native speaker, タイ語の場合ならタイ人が、たとえばアメリカ人の学生が習うときに意味上のどの点が問題になるかを認識することはないので、これが言語学者のする仕事であることは前に述べた通りです。しかし、これらのありとあらゆる問題をすべて教室で教えることはできません。学生の方もまた、この私の学生のように、教室で習った後にもたえず意味の問題に注意しながら学びつづけて行くようにしなければならぬと思います。タイ語であれビルマ語であれ、それを教えるにあたって最も基本的な問題は以上のような点であろうと思います。

質 疑 応 答

——タイ語には丁寧さによって表現が異なったり、

とくに王族語などというものがありますが、タイ語を学ぶときこれが難しい気がします…。

Jones: 私の知る限りでは、丁寧さによる相違は代名詞の選択に注意すればあとは大した問題はないようです。いわゆる王族語については、語彙の選択が最も大きな問題で、サンスクリットやパーリ語、クメル語などに来源する王族語特有の語彙があります。しかしこの場合も文法はとくに普通のことばと変わらないので問題はあります。しかも、現在では王族語は余り重要でなく高等教育を受けたタイ人さえ十分には知りません。国王も私的な場合には自分に対して王族語が使われることを許していないほどなので、この点については余り考えなくてもよいと思います。

——Cornell 大学では一つの外国語、たとえばインドネシア語を修得するのにどれほどの時間をかけますか。フィールドをやるのに必要な程度の修得についてですが…。

Jones: インドネシア語は音韻・文字のどれをとってもアメリカ人には東南アジアの言語の中では最もやさしい方なので、よくできる学生なら1年間でも目的を達することができます。その他の東南アジア諸言語はいずれも難しくて順位をつけがたいですが、アメリカ人にとってはビルマ語・ベトナム語はタイ語よりも難しい。特に声調体系の特殊性がやっかいです。文字は、ベトナム語はローマ字だから問題ないとして、タイ語の文字の方がビルマ語より覚えるのは難しいが、いったん覚えてしまうと組織的・体系的ですからビルマ語よりやさしいでしょう。Cornell 大学ではビルマ語・タイ語・ベトナム語ではフィールドをやる前に3年はかけます。2年だけで成功した学生もいます。

——その方法はいわゆる intensive method ですか。また週何時間、1学年何週間ぐらい授業をしていますか。

Jones: 私たちの方法は semi-intensive ともいうべきもので、第1年では週8時間、1年30週ほどです。第2年では2コースあって共に週3時間、両方とっても、あるいは一方だけでもいいことになっています。一方は読み方で他方は会話の続きです。第3年、第4年は4時間ですが、2時間だけでもよい。しかしその方が宿題が倍になるわけです。

ただ Cornell 大学で東南アジア研究計画に従って

東南アジアの言語を学習するのはたいてい大学院の学生で、一つの major と二つの minor をやらねばならないので semi-intensive とはいえ週8時間は負担が大きすぎるということが問題になっています。最もよい解決方法は専門の研究と別の機会に純粹の intensive course をやることだと思います。たとえば、全10週間で full time, すなわち教室で4時間、他の時間はレコードによる学習に利用するといったやり方です。これには経済的な問題があってもまだ実施していませんが…。

要するに、外国語の学習や教育、つまり語学はアカデミックな学問としての言語学とちがってひとつの技術訓練なので、本来の意味の大学や研究所でやるものではなく訓練機関などでの実地の繰返しでなければならぬということです。

——京大から Cornell に留学したものでインドネシア語の授業では毎時間20~25の新しいセンテンスを記憶せねばならず、家で当初は2時間、のちには1.5時間かかったということですが、一般には宿題として何時間くらい要求しますか。

Jones: とくに何時間ということは要求しません。ひとりひとりで異なるでしょう。また宿題はどうしてもひとりですることになって効果的ではありませんから language laboratory が利用できるようにしたいのですが…。

——われわれは言語研究にあたって、たいていはたとえば単語をバラバラに扱ったりして、いわば遠まわりなやり方で行なって来たのですが、さっきのお話のようにアメリカでは早くから意味の世界にとりくんだので短期間に効果をあげたのには敬服します。

Jones: 実際には全然そうではありません。むしろアメリカこそ遠まわりな方法が多く、最も接近しやすい音韻や文法などの研究にとどまっていることが断然多いようです。ただこうして実地の語学が必要となるとそれではいけないと私が思うというだけです。

——Cornell から出た Echols 教授のインドネシア語辞書を見ても現代語が中心で古文文献を読むのには利用できないようですが、歴史研究のための語学はやらないのですか。

Jones: やっていません。Cornell ではあくまでフィールドを効果的に行なうための語学を目的にしていますから。それからインドネシアの古文文献は古代ジャ

ワ語であってインドネシア語ではないでしょう。

——アメリカではビルマ語・タイ語の講座はどこどこかの大学でやっていますか。

Jones: 決して多くはありません。ビルマ語は、Yale と Cornell でやっています。Washington はタイ語とベトナム語はやっていますが、ビルマ語は現在はやっていません。もちろん Foreign Service Institute や Army Schools でもやっていますが。タイ語の方はもう少し多くて、Cornell, Yale, Indiana, Washington, Hawaii などです。California は年によって講座のあるときもあります。

——Cornell ではビルマ語やタイ語は文字も最初から教えるのですか。

Jones: 最初の6週間くらいは発音の訓練に重点をおくのでローマナイズしたもの以外はやりません。だいたい第1学期(半年期)の中ほどで発音の問題を一応全部すませてからは文字も教えて読めるようにします。

——Yale 大学の方法は、たとえば Hornes のジ

ャワ語教科書を見ても、なかなか興味深いのですが、どう思われますか。

Jones: 基本的には Cornell も Yale も全く同じ方法で別に相違はありません。

——Cornell での1クラスの学生数、教師の数と分担などについてももう少し詳しく述べて下さい。

Jones: 学生数はだいたい1クラス 5~6人です。今年はタイ語の初等コースはありませんでしたが、来年は12名の予定なので2クラスに分けようと思っています。どの言語についても学生数は1クラス最大10人で1~2名のときもあります。教師は各クラスに言語学者と native speaker が1人ずつです。私はタイ語・ビルマ語・ベトナム語を担当していますが、初等コースでは週8時間のうち6時間を native speaker が、残りの2時間を私が講義しています。発音上の問題、書き方、文法などのほか、はじめにお話したような色んな問題を扱います。そのうえに専門的な研究もやっていますのでなかなか忙しいことです。

——色々とありがとうございました。(以上)

追 悼

故 瀬 野 錦 蔵 博 士

東南アジア研究センターの自然科学部門研究担当者、故瀬野錦蔵博士は、病氣療養中のところ薬石効なく8月11日遂に永眠された。親しく博士の教えを受けた者一同まことに哀惜の念に堪えない。

博士は昭和7年京都大学理学部地球物理学科を卒業後、理学部付属火山温泉研究所、理学部地球物理学教室に所属され、昭和14年助教授、昭和36年教授と昇任され、昭和38年からは理学部付属地球物理学研究施設長を併任された。その間主として温泉、地下水、河川の地球物理学的研究に多くの独創的な業績を発表されたのであって、特に温泉に関しては、温泉物理学という新分野の開拓者としてその功績は不滅である。更に博士の功績として特筆すべきは、地球物理学的方法と地球化学的方法の融合であって、近年、そのような立場のもとに日本および東南アジアの河川水中の化学成分の溶出機構の解明にのり出され、すでに本誌第3号(通巻)に掲載された如く、タイ国河川についての解析を進められると共に、ビルマ・インドネシア等での観測調査の計画を進めておられた。

しかし、はからずも病魔のおかすところとなり、計画の実現をみずして他界されたことはまことに残念であり、東南アジアの陸水の研究という大きな目的に対し、かけがえのない指導者を失ったことは惜しみてもあまりある。ここに小文を草し、心から博士の御冥福をお祈りする次第である。

(湯原浩三記)